慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	陽明文庫蔵「道書類」の紹介（四）『〔宝物集〕』翻刻・略解題
Sub Title	
Author	恋田, 知子(Koida, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2008
Jtitle	三田國文 No.48 (2008. 12) ,p.25- 41
JaLC DOI	10.14991/002.20081200-0025
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20081200-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

陽明文庫蔵「道書類」の紹介（四）『〔宝物集〕』翻刻・略解題

恋田知子

前号に続き、陽明文庫蔵「道書類」のうち、『〔宝物集〕』を紹介する。本書については、外題・内題ともに記されておらず、奥書なども有していない。これまでも述べたように、陽明文庫蔵「道書類」は、仮名法語を中心に、あわせて十八種類の書物が一括されたものであり、慶長・元和年間（一五九六―一六二四）の奥書を有するものが含まれていることや、とりたてて書写時期の異なるものも見えないことなどから、本書についても、おそらく同じ時期に書写されたものと推察される。[1]

本書は、『宝物集』二巻本系統の一伝本であるが、前半および末尾を欠くものであり、文意の通らない欠落部分なども多く認められる端本である。しかも、綴じる際に生じたとおぼしき錯簡も多く認められる。特異な伝本としては位置づけられないものの、さまざまな宗派の仮名法語が一括される「道書類」のなかに、本書が含まれているという点については注意を払うべきであろう。書誌については、以下のとおりである。

・函架番号　近ト―七二―レ
・形態　写本。一冊。仮綴。
・寸法　縦二八・二糎。横二一・五糎。
・表紙　なし。
・料紙　楮紙。
・丁数　三十七丁。
・本文　半葉十行。漢字平仮名交じり。字高約二三糎。
・内題　なし。
・奥書　なし。
・印記　一丁表右上に「陽明蔵」の朱額形印あり。

翻刻に際して、本文は底本に忠実を期したが、私に句読点を打つなど、読解の便宜をはかった。なお、錯簡については本来の位置に改め、頁数下の（　）内に現行の頁数を記し、欠落と判断される箇所には、【欠】と付した。また、虫損については□を付した。

注

（1）陽明文庫蔵「道書類」の詳細については、『三田國文』連載の翻刻紹介のほか、拙稿「室町期の往生伝と草子―真盛上人伝関連新出資料をめぐって―」（『唱導文学研究』第六集　三弥井書店　二〇〇八年）、拙稿「説法・法談のヲコ絵―『幻中草打画』の諸本―」（『仏と女の室町―物語草子論―』笠間書院　二〇〇八年）、拙稿「比丘尼御所文化とお伽草子―『恋塚物語』をめぐって―」（徳田和夫氏編

『お伽草子 百花繚乱』笠間書院 二〇〇八年）を参照されたい。

【附記】

本書の閲覧ならび翻刻の御許可を賜った、財団法人陽明文庫に深く感謝申し上げる。また、本書の翻刻・考察に際して、御教示賜った、陽明文庫文庫長名和修先生に、心より御礼申し上げる。

なお、本稿は科学研究費補助金（二〇八二〇〇四六）による研究成果の一部である。

【翻刻】

第一に、道心をおこして、出家とんせいして仏になるへしと申は、これたしかのしゆきやう也。万法は心のなす所にて、さらにへちの法なし。ほつしんをおこしてしやうとをもとむへきなり。ゑいくわん法師は、人木石にあらす、このめはをのつからともにしたをしへける。道心をおこさん物はよきともにしたしむへきなり。せんたんの林にいる人はころもをのつからかうはしく、あさの中のよもきはためさるになをきなり。うみにうかむ舟は万里を過、松によるかつらは千尺の木すゑにのほる。されは、せうれんけせかいの鳥はめうほうを

」1オ（1オ）

さえつれり。このゆへに、道心あらむ人にちかつきて、仏たうをねかふへし。法花きやうには、不親近諸外道梵志とのへ給へり。この心は、かりそめにもあしき友にちかつく事なかれ。よき人にしたしめとなり。心は第一のあたなり。心はこゝろをゆるすへからす。煩悩は家のいぬうてともかとをさらす。心は山のかせきなつけともしたかはす。心はあらきむまのことし。しつめて道心ををこすへし。一ねんほたい心をおこせは、百千万の塔をつくるにはすくれたりと申ぬれは、一ねんのくとくさへむりやうなり。いはんやなかく道心をおこして

」1ウ（1ウ）

ひとへに仏たうをもとめんにおいてをや。されは、しやか如らいけこんきやうの中におほくのたとへをとりてほたいしんのくとくをとき給へり。たとへは、せんけんやくわうゆは一さいのやまひをとゝむるかことく、ほたいしんも一切のほんなうのやまひをとゝむ。たとへは、むま、うし、ひつしのちのなかへしゝのちをいるれは、むま、うし、ひつしのにうはきえうせぬ。又一切のたからの中には如意珠すくれたり。一さいのくとくの中には、ほたいしんのくとくすくれたりとのへ給へり。又ひみつさうきやうには、はしめのほたいしんより

」2オ（2オ）

重々の十あくをのそく。いはんや、第二第三第四においてをや。されは、せんさいとう子のほたいしんをおこしたまひしをは、みろく大しは獅子の座よりおりさせ給ひて、光明をはなちておかみ給へるなり。これとうしのたつときにあらす。ほたいしんのたつときなり。しかりといへとも、とめる人はたのしみにふけりて、しゆつの心さしなし。誰もせんには物うく、あくにはすゝみやすき物なり。しかれ共、

尺迦女らいは、まかたこくの御あるし、しやうほん大王
のわう子にておはしませは十せんのくらゐにそな」2ウ（2ウ）
はりたまひて、ゑいくわにほこり、大しん百くわんに
いねうせられ給へきに、しやうしむしやうのはかなき
ことをなけき給ひて、わうゐをすてたまふのみ
ならす、おやにもつまにもわかれたまひて、たゝ
ひとりたんとくせんに入給ひ、十九しゆつけし給て、
十二ねんのあいた、なんきやうくきやうのこうつもりて、
十二月八日のあかつき、みやうしやうをみたまひ、しよ
ほうしつさうのことはりをさとりたまひてより
後、三かいのしゆしやうのたうしとなり給へるなり。されは、
大こくのあるしとなり給ひたらんは、夢まほろし」3オ（3オ）
のあいたのたのしみなるへし。三せれうたつの
ほとけとなりたまひて、なかくしやうしのくるしみ
をはなれ、けらくふたいの地にさし給こそ有かた
けれ。こゝをもつて、ちよくせのわれらをおもふに、
なにゝ心をとゝむへき。はやく物うきせいろのいと
なみをふりすてゝ、こせうせつしよのいとなみをなし
たまふへきなり。人のいのちのあたなることは、あし
たの露のことく、よひのいなつまにたり。をくれさき
たつあいたこそあれ。つゐにはたれかのこりとゝ
まるへき。されは、女人なれとも、小野ゝこ町は生死
」3ウ（3ウ）
のことはりをしりて、かくそよめる。あるはなくなきは
かすそふ世の中にあはれいつれの日まてなけかん
又かものなりすけかよめる。たれとてもとまりはつ
へき身ならねとまつはさきたつ人そかなしき
藤わらのちかもりかよめる。けふまてはよそに
のみきくはかなさのいつの身の上にならむとすらん
露のいのちのきえぬまに、あるいはきやくしゆのせん
をまふけ、あるいはめのまへのくとくをつくるへき也。
一この夢さめて、のちのついせんの物をは七ふんかひ
とつをうくるとそ申ぬる。ほとけをしへてのたまはく、
」4オ（6オ）
たとへはわうくうにいけあり。此いけに色かたへなる
はちすさけり。ある人このはちすをぬすまんと
思ふ。もし人とかめは、をしのなくまねをよくすれは、
をしそと心えてとかめしとおもひてぬすむ程に、
花はかりに心入て、人のくるをはしらすして、とらへ
られてのちに、をしのなくまねをしけれは、かひも
なくていましめられけり。そのやうに露の身のきえて
のち、くとくをなすはとらへられてのち、をしのなくまね
をしたるかことし。されは、かしこき人は十せんの
くらゐをたにもすてゝめいとをおそれ給ためし、これおほし。
」4ウ（6ウ）
天ちくのこくわうしゆつけし給てのち、おほきに
たのしみ給ふを大しんあやしみて、といたてまつり
けれは、十せんのくらゐをたもちし時は、一さいに
つゐてそのおそれありき。しゆつけして後におそ
るゝ事もなく、たのしきよしをそ申給ける。されは、

かやうの人のおほきことは、かそへつくすにをよはす。
ほとけもがせうしゆつけとくあのくたらとそ仰られ
ける。この心は、われとしのわかゝり○時、しゆけして仏に
なる事をえたりとの給へるなり。されは、わかくて
しゆけめてたかるへき也。むかし七度けんそくしたり
」5オ（4オ）
し物のさいこうをもきかゆへに、大地こくにをちしとき、
さいにんかいはく、我すてに七度けんそくしたるつみに
よりてちこくにおつ。さて、七たひしゆつけしたりし
くとくはいかにかといひけれは、ゑんまわう、たな心を
あはせてらひしたまひて、あくたうをまぬかれけり。
いはんやたうしんをおこしてしゆつけしたるくとく、これ
にておもひやり給ふへきなり。はやく道心をおこし
て、とく仏になり給ふへきなり。第二に、ふかく三
ほうをしんしてほとけになるへしと申は、しよ仏はみな
三ほうをしんして、たうをえ給へるゆへなり。三ほうと
」5ウ（4ウ）
申は、ふつほうそうの三つなり。ほとけに
たのみをかけたてまつりて、しやうふつすへき
むねをおろ〳〵申すへし。法花きやうこんし
三がいかいぜがうごちうしゆしやうしつせごしと
のへ給ふなり。このもんの心は、三かいのしゆしやうはみな
我子なりととき給へは、ちゝのことくにおもひたてまつ
りて一さいのしゆしやうたのみをかけたてまつらは、うたかい
なくほとけになり給へきなり。又ひゆきやうをとき
給ひしときは、七日のあいたしやれんしひの御まなこより
くれなゐの御なみたをなかし給ひて、まつたいの」6オ（5オ）
しゆしやうの道心なきことをそかなしみ給ひし
こんしやうのおやはたゝ一世のちきりはかり也。
おやは子をおもひ、子はをやをおもふといへとも、たゝ
夢まほろしのあいたの事なり。さらに、のちの
世に二たひ見ゆることなし。されは、大持せそん
にちゝのことくたのみをかけたてまつらは、かならすのちの
よをすくい給ふ。おやをもつへき物しゆしやうのため
なり。しかるに、いまけんふつもんほうのけちえんを
するも、たれかちからそや。ひとへに大おんきやうしゆしやか
女らいの御ひくわんなり。この御をしへにあつからすは、
」6ウ（5ウ）

【欠】

いりてしゆしやうにかはりて、くをうけん事けつ
ちやうなりとのたまふ（へる）なり。されは、けんせの御りや
くもいとかなしくそおほゆる。にしさかもとにく
はんおんゐんといふ所においたる女あり。五すんはかり
なるちさうをもとめて、をこけといふ物にいれたて
まつりて、くう物のさはをまいらせて、としをへて
けり。此女田を二たんもちたりけるを、としころ子
成けるおとこにあつらへてつくらせけるに、いかなる
ことか有けん。六月までつくらさりけれは、子をうら
みて、とし比もちまいらせたるちさうにむかゐて、
」7オ（7オ）

あはれ人にてをはしまさむには、この田はつくりて
たひてましとてねたりける夜の夢に、なんちか
田のつくられさる事をかなしむあいた、我つくり
てあたへんとのたまいて、わかやかなるそうのきたりたま
へりとみて、夜のあけかたに夢さめけれは、道を
とをるものゝこゑにて、昨日までつくられさりし田を
夜のまには何物のつくりたるらんといふをきゝて、
夢におもひ合て、我田のもとにゆきてみれは、此田
みなうへられたり。ふしきにおもひて、もしちさう
の御はからいにてもやあるらむといそきかへりてみれは、
」7ウ(7ウ)

御あしてにつちうちつきておはしましけり。
又二てうしゆしやかへんにかみすきのありけるか、
そのあたりのものとも、れいせん河原のゑそて
らのちさうかうをおこなひけるに、かみすきさして心さし
はなかりけれとも、なくさみかてらにましわりて
一年に三とつゝ此かうをつとめけり。あるとし、このこ
かみすきやまい大事にて、いのちおわりおにともに
とらへられて、ゑんまわうくうにゆきぬ。すてにつ
みのきやうちうをたゝさるゝ所に、わかやかなるそう
一人きたり給ひてあなかしこにこいうけて、しや」8オ(8オ)
はへかへるへきみちを、ねん比にをしへられけり。
あまりにうれしくて、いかなる人にておはしまし
けるそととひけれは、我はれいせんかはらのつしに
あり、一年に一と我をくやうし給ひしなりとて、うせ
給ひぬ。かみすきよみかへりて、なみたをなかして
此ことをかたりて、いよ〳〵このちさうをきゑしたて
まつりけり。又ひんかし山に有ける女も、とし久しく
ちさうをねんしたてまつりしゆへに、しゝたるおや
をもちわつらひけるを、あんきやそうにけんし
たまひて、かのしにんを山へをくり、けうやうし給ひ
」8ウ(8ウ)

けり。山をくりのちさうとて、六はらにまします也。
いはんやかくれてのちのりしやうのちのよの御た
すけおもひやりたまひて、いつれの人もみなちさう
ほさつをたのみたてまつるへし。されは、三井てら
のないくう、ちこうはゑん天にちうひやうをうけて、なう
らんする事せんこをしらす。しかるに、おんやうし
せいめいをよひていのらせけれ共、しるしなし。
せいめいかいはく、ちこうはちやうこうかきりある人
なれは、いかにいのりたてまつるとも、しるしあるへからす。
たゝし、御てしの中に、ししやうのちうおんを」9オ(9オ)
しり給ひて、かの御いのちにかはり給ふへき人あらは、
まつりかへんといふ。ちこうはやまひのしのひかた
さに心なき事なれは、わかいのちにかはれとは
いはされとも、てしともの中を見まはせとも、我かはらん
といふ物なし。こゝにせうくうあさりといふてししてい
はたしやうのちきりあさからす。されは、こうはう大しは
しは三世のちきり、おやは一世のちきりと仰られ
しなり。せいめいかいふことく、ししやうのいのちにかは

りて、われかのやまひをうけて、つゐにめいとにをも
むくへし。いそきまへりかへよといふをきゝて、ち
」9ウ（9ウ）
こうなみたをなかしていはく、わかいのちに
かはるへき心さしはうれしけれとも、てし
をころしてさきたてん事は、しゆんきには
つれぬへし。たゝまつりかゆへからすといひ
けれとも、せうくういひつることはなれは、ふつと
おもひきりたりけるを、はゝのありけるかきゝて
八十にあまりたる母をふりすてゝさきたてん
こといかにとせいしけれは、せうくうかいはく、
るてん三かい中、おんあいふのうたんきおんにう
むいしんちつほうおんしやといふようもんを　」10オ（10オ）
ひけり。此心は三かいのうちにるてんすれは、をん
ないたゆる事なし。をんをすてゝむゐに
いる物しんしつのおんをほうする物なりと仏
もとき給へる也。されは、おやのをんは三かいの
うちをはなれさるをん〇なり。ししやうのをん
は三かいをはなれてむゐにいるしんしつの
おんなり。われすてにししやうのめいにかはりなは、
此くりきによりて、母もかならすむゐのみやこに
入給へし。心やすくおもひ給へしといひて、たち
まちにししやうのいのちにかはり、このこうひやう
」10ウ（10ウ）
をうけ、五たひやすからすなうらんす。せうくう
やまひあまりにしのひかたけれは、ほん
そんのゐさうのふとうにむかいたてまつりて、
われししやうのいのちにかはりて、このこうひやう
をうけたり。ねかはくは、みやうわうりんしゆしや
うねんにして、はやくころし給へといひて、ら
いはいしけれは、ゐさうのふとうの御まなこ
より、くれなゐのなみたをなかしたまひて、
なんちはししやうの命にかはる、われは
なんちか身にかはるとおほせられけれは　」11オ（11オ）
せうくうかやまい、たちまちになをりけれは、
ししやうもてしもいのちたすかりけり。されは、
十はうの三世のしよふつはとうたいふんちんにて
わたらせ給へは、いつれの御ひくわんもみなかくの
ことし。されは、いつれのほとけにてもましませ、
たのみたてまつりてほとけに成たまふへし。
又もろ〳〵のきやうろんしんこんのくとくを
かたはしつゝ申へし。むかしく〇はらもんといふ
人あり。一日に千のいき物をころす。としつもり
ぬれは、ころす所の物かすをしらす。こんしやうの
」11ウ（11ウ）
【欠】
くやうすへし。ちかいはかいをきらふへからす。
大こくに玉をふくむとりあり。鳥はたから
ともしらされ共、たまはたから也。されは、そうははかい
なれとも、くやうのくとくはたからとなるなり。こゝを

もつて、羅十三蔵ははちはにまんゑのことし。
ほうはれんけのことしとのたまへり。はちは
ころものことくに身にあまりぬれとも、ほうは
れんけの〇ことし。又こうほう大しは、くとくは大地の
ことし。おのれかために、しよ人にほとこせとの給へり。
かりそめにもしゆつけのたいをえたらむ物をあ　」12オ（12オ）
しくいふへからす。ゆいなといつし物おろかにして、そう
をあなつりしかは、九十一こうむしにむまれてくを
うく。又ある人わかゝりし時、たはふれにらうそう
をわろくいひしかは、五百しやういぬにむまれき。されは、
いかにもあれ、ほうしをくやうしてわうしやう
こくらくをいのり給ふへき物なり。
第三に、かいをたもちてほとけになるへしと申
事は女らいのきんかいに入ぬれは、八万四千のあく
こうほんなうのいくさせは、せめきたるといへとも
まつたくおかさるゝ事なし。梵網経にはかいを　」12ウ（12ウ）
たもつ人は、しやうと人天のほうをうくと
とて申成実論にはかいをたもたさる物は、もろ〳〵
のせんこんをしやうしゆせすとをしへたり。又ちと
ろんには、もし人大せんこんをもとめむと思はゝ、
まさにかいをたもつへしといふ。十ふんりつには、
かいをたもつ人をは二十五のせんしんゐねう
すといへり。このゆへに、よくたもつを十せんと
いひ、あしくやふるを十あくと申なり。かいのさま
ひろし。ほさつかいよりしやみかいにいたるまて、
八万のりつき三千のゐきなととて、さま〳〵　」13オ（13オ）
おほけれとも、ほとけめうかい大わうのためには、
十かいををしへたいゐちやうしやかためには、五
かいをさつけ給ふ。このゆへに、まつ五かいの有さま
を申へし。五かいとは、せつしやうちうたうしやゐん
おんしゆまうこ此五を申なり。一には、ふせつしやう
と申には、ものゝいのちをたゝぬ事なり。せつのゐん
せつのえんせつのこうといふは、みつからころすの
みにあらす。人のころすにもともなはす、人に
をしへてもころさせす。されは、ちかいのひく
さとにいてゝこつしきするに、ある玉つくりの　」13ウ（13ウ）
もとへゆきぬ。かの玉つくりいゑ〇に入たるひまに、
うといふとりきたつて玉をのみぬ。たまつ
くりきたりて、こゝに有けるたまうせたり。
こつしきのしやもんのぬすめるそとて、とら
へてうちせめけれとも、せつしやうかいをやふら
しとて、とりののみたるとはいはす、うちせめ
らるゝに、このかなつちぬけてそはなるとりに
あたりて、すなはちしにけり。しはらくあり
て、しやもんのいはく、此鳥はいきかへるましき
かとゝへは、しにはてたるといひける時、さらは、この
　」14オ（14オ）
とりのはらをあけてみよ、たまあるへしといふ。
そのときたまつくり鳥のはらをあけてみ
けれは玉ありけり。玉つくりこのそうに

むかひて、なにとてやかてこのとりのみたる
よしをはのたまはて、ゆへなくせめられ給ふそと
いひけれは、そうのいはく、我せつしやうかいを
たもつゆへに、いはさるなりといひけれは、
その時たまつくり、此そうをらいはひしてたつ
とみけり。この事天たいにとき給へり。む
かし、こく王のましく〳〵けるか、きやうこうたつ」14ウ（14ウ）
とき、らかんをきえせんかために、むかへ給
ところに、らかんのきたりたまへるよしをそう
しける時、うつごにきるへきところのありける
を、けうにいりてたゝきれとのたまひけるを、
らかむのことゝ心得てくわんにんすなはちら
かんのくひをきりつ。こく王こうちはて給て
らかむこなたへよひたてまつれとおほせられけ
るとき、はやくきれとのたまひつる程に
きりぬと申。こく王このことをかなしみ
あさましくおそろしく覚して、ほとけ　」15オ（15オ）
の御まへゝまいりてさんけしたまへは、ほとけ
のたまはく、むかしこく王はかへるにて、田の中
にましく〳〵ける時、らかんのうふにて田を
つくる程にすきといふ物をもちて、心なら
すかへるのくひをうちきりけり。のうふくい
かなしめともかいなくしてやみぬ。されは、いま
そのこうをつくさんために、心ならすころ
さるゝなりとのたまへり。あやまちさへかくの
ことし。いはんや心をおこしてころさんむ
くひにおいてをや。むししやうしより　」15ウ（15ウ）
しよふつのりやくにもれて、六しゆにりんゑ
して、かなしむは物のいのちをころして、せつ
しやうかいをたもたさりしゆへなりとそ、
ほとけはときたまへる。かへす〳〵物のいのちを
ころすへからす。二にふちうたうと申は、草の
一すちもはりの一ほんもぬしにしらせすし
てとるへからす。いはんや、その外の物をや。むかし
けうほんはたいてすみに、みちのほとりに
おちたるあわをとりたりしゆへに、五百生の
あいた、うへのすかたとなりにき。されは、仏の」16オ（16オ）
物をぬすみたる物は、しやう〳〵せゝてなき物
にむまるゝなり。くろかねははりにてはて、人は
ぬすみにてはつるなり。こんせうこせあさま
しき事なり。されは、かしこき人は人の
あたふる物をさへ、ことによりてとらす。ことに
ぬしのおしむ物ゆめ〳〵とるへからす。又六そく
のぬすみといふ事あり。一にはよろつの物を
みてほしと思ふ。二にはこゑをきく物、人のかたり
つたへたる物をほしとおもふ。三にはものゝかを
かきてほしとおもふ。四にはしたに物のあしわい」16ウ（16ウ）
【欠】
はそくにてありし時、ゐんををかして一人の
子をまうけて六になるとき、しゆきやうのため

にいてんとしけれは、われをはいかになれ
とおもひて行給そといひて、あしにとり
つきてをめきさけひしかは、そのたひはとゝ
まりき。そのゆへにしゆつりのはうへんなく
して、五百世のあいた六しゆにりんゑして、この
たひこそやう〳〵らかむのくわをえたれ。む
かしの六子、すなはちこのからすなりとそのたま
いける。されは、ゐんよく第一の仏たうのさまた」17オ(18オ)
けなり。ねはんきやうに、女人地ごくしのうたん
ふつしゆし、けめんにほさつ、内心如やしやとのへ
給へり。このこゝろは、女人はちこくのつかゐ
にて、よくほとけのたねをたつ。かたちはほさつ
にゝたりといへとも、心のうちはおにのことしとき
給へり。まことにさるにや。あゆく大王のきさきは、
まゝ子のくなら太子をおもひかけ給ひたりける
を、きゝたまはさりけれは、りやうのまなこをく
しりたまひけり。しかのみならす、とし比の
おつとをまゝおとこにころさする女かんかほうてうに
」17ウ(18ウ)
かすをしらす。又ちくしやうにとつく物もあり。これ
みなゐんよくのいたすところなり。よく〳〵つゝし
み給へし。しかれとも、さいけの物には一人
をはゆるし給へり。くわいにんのあひた、月水
をはいましめられたり。なん女のちきりよし
とてもとてもなにのゑきかあるへき。すみや
かにゐんよくをはなれて、むしやうほたいの心
をおこして、仏たうをねかひ給ふへき也。四に、
ふおんしゆと申は、さけをのむましき事なり。
天ちくにちやうしやあり。ひとつのくらのうちにさけ
」18オ(19オ)
をつくれり。つほおほきにしてすめる事いつみの
ことし。ちやうしやの女くらに入て、さけのかめを
みるに、わかきをんなのかたちよきあり。いそき帰
てちやうしやにむかひて、なんちをたのみてかいらう
とうけつのちきりふかし。うらみなかりつるに、かめ
のうちに女をきて、われにみせつるはとうらみ
けれは、ちやうしやふしきにおもひて、いそき行
みれは、おとなしやかなるおとこ有けれは、ちやうしや
かへりてめにいはく、われをすかしやりてま
おとこにころさせんとするにこそとて、とし比の」18ウ(19ウ)
めをうらみてりへつしけるを、一人のらかん
このことをさとりて、さけのかめをみれは、
おとこも女もなし。されは、明暮さけをのみ、
のむほとにゑいのあまりにほんしやうを
うしない、わかかけのさけにうつりたるとは
しらすして、かやうにほれたるうらみことを
いひけるあいた、らかむ此さかめをおとりいたし
て、うちわりてちやうしやふうふにみせられたる
時、ふたりかうらみ事やみけり。又かせうふつの時
一人のうはそくかさけにゑいてほんしやう」19オ(20オ)

をうしなふゆへに、人のめをおかしけつくには、とり
をぬすみころしつ。ぬしはらたちてかこち
けれは、さなきよしをろんしけり。かやうにさ
けはほんしやうをうしなはする物なり。されは、さ
けは五かいをやふる物なるかゆへに、仏ひゆきやうに
とき給へり。ふつせつくい三ごうしあくきやう
ゆいしゆいこんほんふおんへいあくたう
この心は、身とくちと心とを三こうよりおこるつみ
とかは、たゝさけをもつてこんほんとす。かるかゆへ
にのますしてあくたうをとちよとときたまふ。」19ウ(20ウ)
又梵網経には、さけをとりて人にあたへん物は五百
世の間てなき物にむまるゝとのへ給へり。いはんや
みつからのまんにおいてをや。よく〳〵つゝしみ仏
になりたまふへし。五には、ふまうこかいと申て
そら事をすへからさる也。くちのとかは身をはみ、した
のつるきはいのちをきるといふは、そらことをいまし
めたるなり。されは、ちこくにしてさいにんにむかいて
こくそつのいはく、まうこの火は大かいをもやきつへし。
いはんや、まうこの人をやかむことには、草ふかきかれのに
ひをつけたらんことし。ちこくのたきゝはまうこなり。
」20オ(21オ)
されは、まうこのつみにをちたる物とをきよの中
はかすをしらす。ちかくせうこをあらはせるは、むらさき
しきふ、そらことをもつてけんしの物かたりを
つくりしゆへに、ちこくにをちてくけんをうく。
はやくけんしをやきすてゝ、一日きやうをかき
とふらふへしと人の夢に見えけるとて、うた
よみとものあつまりてとふらいし也。たとへは
かり人のしかをもとめうしなひて、こゝをしかやと
をりつるといはんに、かれをころさしかために
しりなからしらすといはんをは、まうこなれとも仏
」20ウ(21ウ)
もゆるし給ふへし。をよそこれにあひにたらん事は
くるしからす。此外のまうこはけしほとのまうこ成
とも、しゆみせんほとのくをうくへし。されは、ゑしん
そうつはとしのはしめにかならす御門のきやうこう
を見たまひけるを、御いもうとのあんやうのあまと申
人のあやしみて、君はむこくの道心ある人なり、何
のゆへにとしことにおほやけの行幸をは見給そ
との給けれは、むかしの十かいのちからによりて、いま十せん
のくらゐにむまれたまひたる事のなつかしけれは、
みたてまつるなり。されは、大臣くきやうよりはし
」21オ(22オ)
めていやしきからかさもちにいたるまて、前世のかい
りきによりて上下のありさまをみて、くわこおん〳〵
のるてんをくわんするなりとそのたまひける。こんせ
こせのめてたき事は、たゝ五かいをたもつに過たる
ことなし。たとへは、もろ〳〵のあくねんほんなうは行
しやのためにかたき也。かのかたきをうたんとおもはゝ、
せんしんのせいをそろへて、一あしもしりそくことな

かれ。そのときあくねんのまうせいをはおとされてにけ
かくれぬ。しかりといへとも、やゝもすれは、すきをみてほん
なうのやからむほんをおこす。おこすといへともせんしんの
」21ウ（22ウ）
はかりことかしこけれは、つゐにまうねんのかたき
ほろひうせて、むゐのみやこのあるしとなりて
なかくたのしみにほこりて、二たひしやうしを
うくる事なし。いかにも〳〵女らいのきんかいをた
もちて、後の世をねかふへし。一しやうはひとましろき
のほとなり。返々いるかせにおもふへからす。かやうの事
をふかくしんするをちしやと申なり。
第四に、もろ〳〵のきやうこうをつみて仏になるへしと
申は、しよ仏のみな六はらみつをきやうして、しやう
かくなり給へり。六はらみつと申は、ひとつには、たんはら
」22オ（23オ）
みつふせの事なり。二には、しらはらみつかいをたもつ
事也。三には、せんたいはらみつ物をこらへてあたかた
きのとかをもおもひなをして、人のいたむへきことを
わかみにおもひしるへき也。四には、ひりやはらみつ
しやうしんをかたくする也。五にはせんはらみつ心を
しつかにもちて仏たうをもとむへきなり。六には、はん
にやはらみつちゑをもつて、まよひのしゆしやうを
すゝめて、こくらくへみちひくへし。この六をあは
せて六度まんきやうを申也。されは、しやうしやりせん
にんはもとゝりに鳥のすをくいて子をうむにかいこの
」22ウ（23ウ）
すたつまてはたらかす。しつたたいしはたん
とくせんにいり、かせうそんしやはけいそく山にこも
りてそおこなひ給ひける。しかのみならす、おほみねか
つら木をとをり、たうをたてほとけをつくり、きやう
をよみ、はなをつみ、水にむすふ人みなふつたうなる
へきおこなひ也。されは、かもふにんはあゆむあしのした
ことにれんけのひらけける也。むかしほとけにはなを
たてまつりしゆへなり。むかしたうのくつれたる
所につちをぬりてつくろいたりし人、九十一こうあく
たうをまぬかれて、きやひらちやうしやの子にむ」23オ（24オ）
まれきほとけのはくのはけたりしも、はくををし
たりしゆへに、みらいにかならすほとけに成てくわう
みやう女らいといはるへしとそほとけさつけたまへる。
天ちくしんたんわかてうに心ある人のたれかふつ
たうをしゆきやうせさる事のある。あゆく大王は八万
四千のたうをたて、りやうのふていは二千九百のたうを
たて、きやうきほさつは四十九ゐんをたてたまへり。いつれ
のかたきにてもあれ、心のひかんかたをつとめおこなひて
ほとけに成給ふへき也。
第五にしやうとにわうしやうせんといふくわんをおこして
」23ウ（24ウ）
ほとけになるへしと申は、もろ〳〵の仏菩薩は
しゆしやうをあはれみ給ひて、をの〳〵くわんをたて
給ふ。その心おほくのきやうにみえたり。尺迦女らい

は五百の願薬師女らいは十二のくわん、阿弥陀は四十八
くわん、ふけんほさつは十くはんをの〳〵われらしゆ
しやうをあはれみてすくはんとおもひ合てちかひ
給ふ御心さしなり。されはされは心あらん人は
くわんをおこして、ふつたうをしやうしゆしてう
ゑんのしゆうやうをみちひき、むゑんのさいにんを
とふらふへき也。大しやうこんろんには、きやうこうは
」24オ(17オ)
うしのくるまのことし。くわんはうしかいのことし。行
のうしのくるまあれとも、くわんのうしかいなけ
れは、庭をめくる事なし。はやくきやう
こうをつみて、わうしやうのくわんをおこして
浄土にまふてゝ一さいしゆしやうをみちひき
給ふへきなり。こゝをもつて普賢菩薩
はぐわん我りんよくみやうしゆじしんぢよ一切
しやしやうけめんけんひ仏阿弥陀そくとくわう
しやうあんらんこくといへり。此心はねかはくは、我
りんしゆの時にのそまは、ことく〳〵一さいのしやう
」24ウ(17ウ)

【欠】

このくやうをとけしめ給へとかきたり。此しやもん
の名のりのもしをみれは、我かなのりのもし
とをなしもしなり。これもくわんりきのゆへ
なり。又むかしみめうのあまといふ物有。しゆく
みやうつうをゑて、むかしのことをかたりてい
わく、我むかし一人のまゝ子をにくみてひそかに
かしらにはりをさしつ、はゝあやしみて我
をうたかひしかは、おほくのちかことをたてたりき。
そのちか事ひとつもたかふことなくしやう〳〵
せゝにおいたりしなり。いまらかむのくわをえたり
」25オ(26オ)
といへとも、かしらよりあしのうらまてはりをとほす
やうなるくけんありとそかたりける。何事も一ねん
おこす所のくわんはしやう〳〵せゝにはたす也。されは、
わうしやうこくらくをねかはんに、阿みた女らいし
うんにのり、さいはうよりらいかうし給はん事
うたかひあるへからす。とをきたとへは申にをよ
はす。ちかくはとう大寺のとくこうといつし人、大般
若くやうすへきくわんをはたすして、にわかに
命をはりけるか、ゑんまわうくうより返されてく
やうをとけてほとなくわうしやうせられけり。其」25ウ(26ウ)
時ゑんま王のさつけ給ひしきやうもんあり。
はんにやたい一きやうしきやうけつゑんしや
すいうちうこつしやうひつたうとくけたつ
此心ははんにやは第一のけう也。此きやうをけち
えんする物は、こつしやうおもしといへとも、かならす
けたつをうるといへり。その比ゑんまわうしゆ
せられたるきやうもん成とて、あまねくしよにん
申あへり。
第六に、こつしやうをさむけして、ほとけ

になるへしと申は、人かいにしやうをうくるたの」26オ(27オ)
しみは、さんけのほうにあひしゆへ也。道しやく
禅師のあんらくしうにきやうをひきての給
はく、人の一日一夜をふるあいたをふるには八おく四
千の思あり。いはんや、ねんくにおこすおもひの
かすむりやうむへんなり。これみな三つのこう也
といへり。いはんや一せちかいのこうをや。いはんや、しやう
〳〵せゝのこうをや。この心をはゑいくわん法師か七
たんのしきにくはしくしるせり。心ちくわんおんには、
在家のものはよくほんなうのゐんをまねく。しかり
といへともさんけすれは、あらふるほんなうみな」26ウ(27ウ)
めつしてほたいの花ひらく。さむけすれ
は、大ゑんきやうをみる。さんけすれは、ほう
しよにいたる百ちやうのいしなれ共、舟いかた
につみぬれは、大かいにしつむ事なし。つみは
百ちやうのいしのことし。さむけは舟いかたの
ことし。はやくもろ〳〵のこつしやうをさんけ
して、しやうしのくかいをわたるへきなり。され
は、ふけんほさつはうさうむさうせつりこし
此三つのさんけをおしへ給へり。よく〳〵心え
しるへし。まつしきさうのさんけといふは、」27オ(28オ)
むししやうしよりつくりしつみをはちかなしみ
てほつろていきうして、あるひはほんそんにむかい、
あるひはけんしやうにむかゐてさんけするなり。
大きやうにいはく、もし人つみをつくりてかくせは、
すこしきつみ成といへとも、ことはをさむけして
こゝろをさんけせさるは、いたつら事なり。心
のつみはさんしやうをほろほし給ふへし。これを
まことのさんけといふなり。次に、むさうのさんけと
いふは、一切のこつしやうはみなまうさう也。しやうすれ共
そのたいといふ物なし。これをりのさんけと申なり。
」27ウ(28ウ)
たとへは、千年のやみはくらけれとも、さんけの
一すんのしそくをいれぬれは、千ねんのやみははれ
ぬへし。たとへは、こつしやうのたき木は千りに
つみたりといふとも、けしはかりのさんけの火を
つけぬれは、こと〳〵くやけうせぬ。たとへはあく
こうのくもきりはあつけれとも、さんけのかせふ
けはあくこうのくもきりみなはれて、ほつしやう
のそらあきらか也。たとへはほんなうの露しもふ
かけれとも、さんけのゑにちいてぬれは、すなはち
きえうせぬ。此心をふけんきやうにときたまへり。
」28オ(29オ)
一切こつしやうかいかいちうもうさうしやうにやくよく
さんけしやたんさししつさうしゆさいによさう
ろゑにちのうせうちよせこおうししんさんけ六しやう
こん。この心をうたによめり。　覚樹法師
いのちをもつみをも露にたとへけりきえは
ともにやきえんとすらん　前さい宮大輔
心よりむすひをきける霜なれは思ひとく日に

のこらさりけり。さんけと申は、しやう〳〵せゝにつ
くるつみをはちあくこうほんなうにおちをそるゝを
いふなり。ひとつのせうこを申すへし。天ちくにあき人
」28オ(29オ)

【欠】

天下みたる天下みたれぬれは、はんみんの
なけきなり。たみのなけきすなはちさい
こう也。まつりことのあしきはこんせ後世の
たゝり也。されはきのふんていは六さい物の命
をころし給はす。むかし小しやみの有けるか、あり
のひとつ水になかれたるをとりていけたりしに
よりて、こんせうのいのちのひたりきやしや
ちやうしやはひつまりたるいけの水にすめるうほ
をとりて、大かいにはなちけるゆへにちやうしや
のとくをあらはす。されは八まん大ほさつのいはく、
」29オ(30オ)

しんくうくわうこうのいこくたいちの御ときお
ほくのせつしやうをつくらせ給ひしかは、そのくん
るいをすくはんかために、すくなき水にすめる
うほをとりて大かいにはなちたまへり。いまの
はうしやうゑのまつりことこれなり。はうしやう
ゑとはいけるをはなつゑとかけり。たとへちい
さきかたちをうけたる物なれ共、命ををし
む事は大さんより猶をもし。たとへちく
るいにむまるといへとも、子をおもふ事は人かい
よりもすきたり。返々ものゝいのちをころ
」29ウ(30ウ)

【欠】

りきしやをわかかたへよはすはいのちをたつ
へしといひけれとも、かうは天下をたもつ
ましきさう有とみて、子にはたゝかうそにつ
かへよ、我はいのちをすつといひをきて、つるき
におちかゝりてうせにけり。されは、心地くわんきやう
には世人為子ざうしよざいたさい三づぢやう
じゆくととき給へり。此心はよの人は子のために
もろ〳〵のつみをつくりて、三つにおちてなかく
くるしみをうくるそとのへたまへり。又わかてう
むさしのくにゝむかしひまろといふ物有。おも
はしきめをもちたりけるか、国ぬしの京上しける
ともしてのほるへきにて有けるに、此女を
すてゝのほらん事をかなしみて、きんきのよしを
いひてのほらしとてはゝを山の中にくして行て
ころさんとする時、大地にはかにわれてかのひ
まろおち入けるを、もゝとりとりてひきあくるは
はゝなり。子の大地のそこへおち入事をかなし
みて、我かいのちのうせん事はおそれす、かたき
となれる子を引あけしは、いとわりなくそお
ほゆる。くはしくはひまろかてんにみへたり。
これほとに心さしのあさからぬおやのためにけう
やうせさらむ人あらむや。しかりといへとも、天人は
たのしみにふけりて、けうやうのこゝろさしなくして
」30ウ(31ウ)

三つのくるしみにせめらるゝ也。されは仏は御母の
けうやうのためにたうり□□□のほり、ほうおんきや
うをときたまひしなり。こくらくにわうしやうしたる
しゆしやうにむかゐてふ□□んなうのいはく、
ちゝはゝけうやうのわうしやうかしちやうふしの
わうしやうかととふなり。されは、ちゝはゝけう
やうの心さしをもつ□こくらくにわうしやうせん」31オ(25オ)
事これにてもしるへし。これせつりこしの
さんけのたいゐなり。にんめい天王は一年かあいた
のつみをさんけせんとて、としのはてにかならす
三千仏の御名をきゝてそさいしやうをさんけ
したまひける。これを仏名と名つけていまに
たえす。むかしいまの人此心をおほくうたによめり。

たいらのかねなり

あら玉のとしもつくれはつくりけんつみも残らすきえやしぬらん

みなもとの仲綱

過にしものちもしらるゝ身のうさにみよの仏のなつかしき哉

」31ウ(25ウ)

第七にもろ〳〵のせをきやうすへしと申は、しよ仏
のみなせをほとこして、しやうかくをなり給へり。
これをたんはらみつといふりうしゆほさつはせを
きやうする人は月のはしめていつるかことく、しよ
人にうやまはるゝとのたまへり。こくしやうさいしを
すてん事草木よりもかろくす、もくしゆそく
をせする事□□きよりもやすくすへし。

こゝをもつて□□□やうには、こくしやうさいし
つもく□□□□身(しん)にくしゆそくふしやしん
みやうとときたま□□。この心はほうのためには」32オ(32オ)
くにところめこはい□□およはす、五たひ六こん
およひいのちを□をしまされとをしへ給へり。されは
しひ大王ははとにかはりてみつからのしゝむらを
たかにあたへ、さつたわうしはうへたるとらに
わか身をほとこし、せつせんとうしはむしやう
のもんにいのちをかへ、しやりほつそんしやは
まなこをぬきて、こつけんはら門にとらせし也。
これならすせに心さしある人少々申すへし。
あしやせわうほとけをむかへまいらせてせつほう
させたてまつりて、夜に入てほとけの御かへり」32ウ(32ウ)
ありけれは、あしやせわうくうより、きおんしや
しやまて火をともし給ひ□□に、ひん女のせに二文
もちたりけるか、これをあふらにかへて、ともしたり
けるゆへに、三十一こうをへてほとけになるへ□とて□□
とうくわう女らいとそさつけたまひし、これを□□□
万とうよりひん女か一とうとは申なり。後□□
は申におよはす。こんせにとくをあらはす事共おほ
きなり。天ちくにゑしあり。きやひらしやうにしやう
ようをえて行ぬ。さいしたちゐにまつほとによの中
を過わひて、ゑしのかへるをたのみておほくの人の

」33オ(33オ)

ものをかりてつかひて月日ををくりけるに、ゑし

十二年といふにこかねを三十両えてかへるに、道のほとり
にたうの有けるに仏にはくおさんとて、こかねをすゝむる
ひしりあり。ゑしおもひけるはいゑにもちてかへりてはた□
こんしやうのたからにてこそあらむすれ。ほとけにま
いらせてしやう〳〵せゝのたからになさんと思ひてこのこかね
をほとけにまいらせけり。てをむなしくしていゑに
かへりけるにさいしよろこひて、なにをかもちてかへり
□□□とゝひけれは、ありのまゝにかたりけるをきゝて、
このほとたのみまちつるかひもなく、いまははやまとひ
」33ウ（33ウ）
物になりぬとかなしみなけくを、おほやけ此事を
きこしめして、心おほきなる物なり。国のつかさし
るへしとてくにのかみになし給へり。こんしやうの
りしやうかくのことし。こしやうのうつたへ思ひやり
給ふへし。されは、ほとけの御はたへのこんしき
なる事はゆをわかして、人にあひせ給ひし
ゆへなり。こゝをもつて、くわうみやうくわうこうは
ゆをわかしてみつから人のあかをすりたまひしに、
おそろしけなるかつたいの我かあかすりてたへと
いひけれは、くわんをやふらしとて、ひそかにあかを
」34オ（34オ）
すりたまふとて、此事人にないひそとのたまひ
けれは、かつたい又あしゆくふつのあかすりたりと
人になのたまひそ、きさきとてかきけすやうに
うせにけり。されは、あしゆくふつへんけし給ひて
かの心さしの程を心み給し也。ほとけせんせの
くとくをほめ給に、十方のこくとをちりとなして、そ
のくにの草木くわりやくとしり、三千せかいの
水を大かいに入て、その川の水とはしるとも、せの
くとくはたやすくかそへつくすへからすとの給へり。されは、
くい物を人にあたふるは五のとくをあたふるといへり。一には
」34ウ（34ウ）
いのち、二にはいろ、三にはちから、四にはやすらかなる事、
五にはことは也。この五の事は物をくわされは、いつれも
かなはす。かうけんしゆといふ木のみはけしよりも
ちいさけれとも、一夜に百ちやうおひのほりて、その
かけに五百りやうのくるまをかくす。せのくとくもかのことし。
すこしきくとくなれ共、かならすちこくにておほきなる
くとくとなれり。されは、こくそつさいにんにむかいて
なとくとくをはせすして、ならくのこきやうへはかへり
たるそといへは、さいにんひんくむふくにして、たから
をほしかりしゆへに、すこしのせんこんをもなさすと
」35オ（35オ）
いへは、こくそついかれるまなこをみひらきて、はけしき
こゑをあけていはく、いたつらにのへにさきし花一枝
ほとけせしたてまつらん心さし、まつしきによるへ
からす。むなしくたにゝなかるゝ水一むすひ、そうに
くやうしほとこさん事たからなきによるへからす
とそ申ける。はやく一花一水なりとも、ふつほうそう
にせして、ほとけになり給ふへし。

第八に、くわんねんををこして、ぶつぢをいのる
と申は、そしせんとくみなくわんによるかゆへにみな
せし也。たとへはしやうくんに成たる人のすい
」35ウ(35ウ)
ちやうのうちにふしなから、はかりことをはんりの
ほかにめくらし、天下をおさむるかことし。かしこき
人はしはのいほりのうちにゐなから、十万をくの
ほかなるこくらくしやうとのゑほうしやうこんをくわん
して、わうしやうのほんゐをとくる物なり。されは
しやうとしやうせつは、くわんねんのたな心のうちに
ありといへり。あるひはみた女らいのくとく○ほう
れんたひにさして、はるかにくわうみやうをはなち給ふ
事をくわんし、あるひは七てうほうしゆのしたに
くわんおんせいしの二ほさつ大ほんわかの御こゑして
」36オ(36オ)
せつほうし給ふ事をくわんし、あるひはしうんにのりて
さいはうにあらはれ給ふ事をくわんし、あるひは六十
万をくないたこうかしやゆしゆんの大しんをくわんし、
あるひはみけんひやくかうの五しゆみのやうなるをくわん
し、あるひはくうてんろうかくのひきやうするをくわんし、
あるひは上ほんれんたいのあかつきのたのしみの
こゑをくわんし、あるひはふかんゑんなうの五こん
五りきのほうもんをさへつるをくわんして、八十
をくこうのさいしやうをのそきて、つゐにあんやう
しやうせつにわうしやうするなり。くわしくはくわん
」36ウ(36ウ)
きやうにとき給へり。これを十六さう
くわんといふ。あるひはわか身の中のしんふにしつさう
をくわんし、あるひはしよ法のくうしやくなる事を
くわんし、あるひはこの身のふしやうなることをく
わんして、みなわうしやうこくらくのゐんとするなり。
しんによしつさうをくわんするといふは、心仏及
衆生の思ひをなして、是三　とくわんする也。
此心はこゝろとほとけとしゆしやう、このみつはしや
へつなしとくわんするなり。
一切しゆしやうしつうふつしやう女らいしやうちうむ
」37オ(37オ)
うへんやくとのへ給へり。この心は、一さいのしゆしやうは
こと〳〵くふつしやうあり。女らいしやうちうにして
へんする事なしといへり。このゆへに心ある人はみな
一しき一かうむひ中たうとくわんして、しんによしつ
さうひとつなりとしるなり。ふきやうほさつのふもん
きやうまんとおかみ給ひしも、一さいしゆしやうふつ
しやうをくしたりとくわんし給ひしなり。しやう
ある物はいつれかふつしやうをくせさるへき。われらか
むねのうちに本覚の心法身の妙法の
さして三十七そんかた時もたちさり給ふ事なし。」37ウ(37ウ)
【欠】